

〈資料〉

他者との多くの交流と高い活動能力をもつ離島高齢女性の他者への思いに関する事例報告

井上高博¹⁾ 錦戸慶恵²⁾ 山口善子¹⁾

Case Report of the elderly woman living in remote islands has been high level interactions with others and functional capacities

INOUE Takahiro¹⁾ NISHIKIDO Yoshie²⁾ YAMAGUCHI Yoshiko¹⁾

1) 活水女子大学看護学部 2) 島原市医師会看護学校

要 旨

目的：本研究の目的は、他者との交流人数が多く、活動能力も高い状態で維持していた離島高齢女性1事例について、他者への思いの様相を明らかにすることである。

方法：離島 A 町の地域包括支援センター専門職者らによるアンケート調査で老研式活動能力および Lubben 社会的ネットワーク日本語短縮版尺度の満点者を選定し、半構造的インタビュー調査を高齢女性1名に行った。

結果：他者との多くの交流と高い活動能力をもつ離島高齢女性の他者への思いとして、【人付き合いで感じる気遣い：交流する人々への好感】【人付き合いで感じる巡り合わせの良さ：出会った人に大切にされることの実感】【人付き合いで心掛けていること：欲深きことは考えずに謙虚に接する心掛け】【人付き合いのための外出：外出しないと得られない人との交流】が明らかとなった。

キーワード 活動能力, 人付き合い, 離島高齢女性, 他者への思い, 老年的超越

I. はじめに

現在、全国で地域包括ケアシステム構築（厚生労働省, 2013）が進められている。そのシステムには、自らの力で行う自助、身近な人の助けとされる互助、医療および介護などの社会保障システムの助けとされる共助、国や自治体などからの経済的支援などの助けとされる公助の4つの助けがある。特に高齢者においては、自助の一つである身体機能をも高めることにより、フレイル（Fried et al. 2001）予防が可能となる（金, 2018；上村ら, 2018）。

高齢者の健康状態に影響する要因には、活動能力の維持および向上（片寄ら, 2019；高柳ら, 2014）のほか、他者との交流が多いこと（宇都宮ら, 2019）が指摘されている。高齢者の居住地域別では、都

市部、農村部、離島の順で活動能力ならびに他者との付き合いが多く（井上, 2018）、都市の度合い（大都市地域、都市的地域、郡部的地域）による高齢者の社会活動の地域差では、大都市地域は郡部的地域と比べて、社会活動を行う高齢者が多いことが指摘されている（齋藤ら, 2015）。また、イギリス都市部と農村部在住高齢者の社会交流に関する研究（Dahlberg et al, 2018）では、農村部は都市部と比べて、近隣住民との疎遠が健康状態に悪影響を及ぼすことを明らかにした。そのため、離島に住む高齢者の活動能力ならびに他者との付き合いが多い事例においては、都市および農村部と比べて希有な事例と判断し、良好な健康状態の解明にも寄与すると考えた。

離島の主な人間関係は、血縁および地縁（濱野

ら、2012) である。その限られた生活環境で暮らす中、日用品の買い物や公共交通機関の利用した外出などの手段の日常生活活動、新聞や雑誌などを読む知的活動、友人や病弱な知人宅を見舞うことができる社会活動を実践していることに加え、多くの他者との交流をもつ高齢者においては、どのような他者への思いがあるのか。その解明は、離島ならびにへき地などの条件不利地域(本多ら、2012)における地域包括ケアシステムの構築を行うための一資料となると考えた。

よって、本研究は、他者との交流人数が多く、活動能力も高い状態で維持していた離島高齢女性について、他者への思いの様相を明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1. 対象事例の選定方法

離島 A 町にある地域包括支援センター専門職者らによるアンケート調査を本調査の 2018 年に実施 (42 名) した。そのうち、他者との交流人数を評価する Lubben の社会的ネットワーク日本語短縮版尺度 (栗本ら、2011) ならびに地域在住高齢者の活動能力を評価する老研式活動能力指標 (古谷野ら、1975) の合計得点がともに満点の 1 名を選定した。Lubben の社会的ネットワークは 30 点 (月 9 人以上との他者との交流がある)、老研式活動能力指標は 13 点 (外出や社会活動が自立している) が満点である。当該対象者には、地域包括支援センター管理者を通じて、事前に本研究参加の内諾を得た。

2. 事例紹介

A 氏、91 歳女性 (介護予防事業の総合事業対象者) 長男夫婦と 3 人暮らしであり、高血圧、腰椎すべり症で在宅療養中であった。

3. データ収集方法

インタビューガイドに沿って実施した。その内容は、1) どのような人付き合いをしているか、2) 人付き合いを続けている理由とは何か、3) 人付き合いで思うことや考えることは何かとした。調査場所は、A 氏の自宅とし、A 町の地域包括支援センター管理者と同行して 2019 年 2 月

に半構造面接を 1 回行った。インタビュー内容は、対象者に同意を得て、IC レコーダーに録音した。その時間は 15 分 26 秒であった。録音した音声データを基に逐語録を作成した。

4. 分析方法

本研究は、山浦 (2012) の質的統合法 (KJ 法) を用いた。逐語録から、A 氏の人付き合いに基づく内容を語られた意味内容が 1 つになるように単位化して 16 枚のラベルを作成した。類似したラベルを集めて、4 段階のグループ編成を行い、4 枚の最終ラベルに集約した。最終ラベル同士の関係性を適切に示す配置を決定し、記号やフレーズを用いて空間配置図を作成した (図 1 : A 氏の他者への思いの様相)。シンボルマークは、【事柄 : エッセンス】とした。事柄は全体のラベルの位置づけを表し、エッセンスは最終ラベルの内容を要約した。最後に、空間配置図の概要を叙述化した。

分析過程の思考内容の妥当性の確保は研究者同士で行った。空間配置図と叙述化は、A 町の地域包括支援センター管理者の確認を受け、インタビュー内容との整合性を確保した。また、質的研究の専門家から助言を受けた。

5. 倫理的配慮

活水女子大学倫理委員会の承認 (倫 18-002 号) を得た。対象者には、本研究への参加は自由意思を尊重すること、インタビュー途中での辞退もできること、本研究を辞退することによる介護および福祉サービスの受給に関する不利益は全くないことを口頭と文章で説明し、研究同意を書面で得た。

III. 結果

A 氏の他者への思いの様相 (図 1) の叙述化は、以下のとおりであった。

A 氏は、【人付き合いで感じる気遣い : 交流する人々の好感】や【人付き合いで感じる巡り合わせの良さ : 出会った人に大切にされることの実感】に共通する、「交流する人々から受ける好意や親切」を感じていた。【人付き合いで感じる気遣い】や【人付き合いで感じる巡り合わせの良さ】は、A 氏の

【人付き合いで心掛けていること：欲深きことは考えずに謙虚に接する心掛け】につながっており、A 氏の【人付き合いで心掛けていること】がさらに【人付き合いで感じる気遣い】や【人付き合いで感じる巡り合わせの良さ】をもたらす相互作用が見られた。この【人付き合いで感じる気遣い】や【人付き合いで感じる巡り合わせの良さ】は、A 氏の【人付き合いのための外出：外出しないと得られない人との交流】という行動の基盤となっていた。さらに、【人付き合いのための外出】は【人付き合いで感じる気遣い】や【人付き合いで感じる巡り合わせの良さ】を助長させる関係にあった。

最終ラベルとシンボルマークに関係した A 氏の主な発言内容は、次のとおりであった。

1) 【人付き合いで感じる気遣い：交流する人々の好感】 グランドゴルフを一緒にする人達はよく気遣いをしてくれる素晴らしい人達である。

A 氏は「(人との) 交流が一番。」と話し、「あの、人の顔をね、もう、皆良か人ばかりですよ。あそこ (グランドゴルフ) に来る人はね、だから、人の悪口とか言う人は誰もいない。もう、聖域っち思います。」や「皆、あそこ (グランドゴルフ) に来る人は、選び抜かれた感じのような人でね。」と話した。そのグランドゴルフには、A 氏の子どもと同じ年の人々も参加していた。

2) 【人付き合いで感じる巡り合わせの良さ：出会った人に大切にされることの実感】(人付き合いをする時に思うことは) 昔から人に愛される。私、愛されるように出来ちゃってですよ。本当に私の巡り合いで一生ね、誰も悪い人に巡り合った事ないんです。

A 氏は、「私は、そげん、先輩面して、口上言わんで。(他者で) 言う人もいるのよ。ああだ、こうだ、て。」との発言後に、「謙遜を目的に、なるべく、迷惑をかけないように、好かれるように行動しています。」や「本当に私の巡り合いで一生ね、誰も悪い人に巡り合ったことないんです。」と語った。

3) 【人付き合いで心掛けていること：欲深きことは考えずに謙虚に接する心掛け】

A 氏は、人付き合いについて、「もうこの年 (91)

歳ですからね、欲深きことは考えずに、ただその日その日を若い人の迷惑にならないように生きれたらいいなって。」や「(若い人に対しては) 文句は言えないです。よく、私たちに気遣いもして下さい。有難いなあ。A 町民は、皆親切で有難いですよねえ。」と話した。その一方で、「誠にもう、我慢強いです私、本当に。我慢の子だった。」とも話した。

4) 【人付き合い目的の外出：外出しないと得られない人との交流】(普段は) 1人でね (過ごして)、あの、(外に) 出はらないと、(知り合いに) 会えない。

A 氏は、「出はらないと (外出しないと人に)、会えない。」理由から、自宅から片道 2km 程にある総合運動公園 (グランドゴルフ会場) まで自転車で週 3 回通っていた。「(グランドゴルフへ行く) 理由はやっぱり、あの、(人との) 交流が一番。」と話した。「そこ (グランドゴルフ会場) でやっぱり、10 人以上の交流があるわけですね。(交流する時間は) 2 時間半くらいですけど。」さらに、「(グランドゴルフ参加者が) 20 人以上になると、くじ引きで 4~5 グループに分かれて (グランドゴルフを) するんです。普通少なくとも 16 名は来ますもんね。そこでもくじを引いて……」と話した。

IV. 考察

本研究では、ひとりの女性高齢者 (91 歳) における他者への思いの様相として、【人付き合いで感じる気遣い：交流する人々の好感】【人付き合いで感じる巡り合わせの良さ：出会った人に大切にされることの実感】【人付き合いで心掛けていること：人を煩わせずに謙虚に接する心掛け】【人付き合いのための外出：外出しないと得られない人との交流】であることを明らかにした。

本結果から、A 氏は他者とのつながりを強く実感していること (小野ら, 2018) が理解された。つながりの実感とは、過去や現在において、事実として存在し、関わってきた人や大切にしている習慣などを想い、親和性を感じること (小野ら, 2018) とされる。

【人付き合いで心掛けていること：欲深きことは考えずに謙虚に接する心掛け】を現わした A 氏

の語りの一部には、「もうこの年 (91) 歳ですからね、欲深きことは考えずに、ただその日その日を若い人の迷惑にならないように生きていきたいなって。」があった。この発言内容は、高齢になると自分の欲求を成し遂げていくという自己中心的傾向が弱まるとともに、他者を重んじる利他性が高まる「自己意識」(増井, 2016 : Toenstan, 1989) に相当する発言と考え、シンボルマーク形成にも影響したと考える。

また、【人付き合いで感じる気遣い：交流する人々の好感】を現した A 氏の語りには、「(前略) あそこ (グランドゴルフ) に来る人はね。だから、人の悪口とか言う人は誰もいない。もう、聖域っち思います。」や「皆、あそこ (グランドゴルフ) に来る人は、選び抜かれた感じのような人でね。」があった。この発言内容は、過去の社会的地位や役割に対するこだわりのない、限られた対人関係の中で深い関係を構築する「社会との関係」(増井, 2016 :) 相当する発言と考えられ、シンボルマーク形成に影響したと考える。

さらに、【人付き合いで感じる巡り合わせの良さ：出会った人に大切にされることの実感】を現した A 氏の語りの一部には、「本当に私の巡り合いで一生涯、誰も悪い人に巡り合ったことないんです。」があった。この発言内容は、自己の存在や命が過去から未来の大きな流れであることを認識していた (増井, 2016 : Toenstan, 1989) と考える。本研究結果ならびに先行研究 (増井ら, 2010) においても、宇宙という大いなる存在とのつながりの認識をもつ「宇宙的意識」(増井, 2016 : Toenstan, 1989) という直接的な発言はなかった。しかし、その心理領域に近い発言内容であったと考える。

上記より、本結果は Toenstan (1989) の Geronttranscendence (老年的超越) 理論の 3 つの心理領域 1) 「自己意識」、2) 「社会との関係」、3) 「宇宙的意識」(増井, 2016 : Toenstan, 1989) との関係性が示唆された (図 2 : A 氏の他者への思いの様相と老年的超越の理論枠組み)。老年的超越とは、超高齢期における幸福な老い (小野ら, 2018) とされ、高齢期に高まる状態像としての自然な心理変化とも言われている (伊藤ら, 2012)。

本研究対象者の A 氏においては、老年的超越理論の 3 領域を満たした心理的状況が基盤となり、

【人付き合いのための外出：外出しないと得られない人との交流】へとつながり、日常生活における活動能力の高さに影響した (鳥谷, 2002 : 田中ら, 2016) と考える。

V. おわりに

本研究により、他者との多くの交流と高い活動能力をもつ離島高齢女性の他者への思いとして、

【人付き合いで感じる気遣い：交流する人々への好感】【人付き合いで感じる巡り合わせの良さ：出会った人に大切にされることの実感】【人付き合いで心掛けていること：欲深きことは考えずに謙虚に接する心掛け】【人付き合いのための外出：外出しないと得られない人との交流】があることが示された。

VI. 本研究の限界

本研究の対象者は、A 町に住むひとりの女性高齢者であり、インタビュー時間は 15 分程度とデータ分析に必要な情報が少ないことが限界である。また、地域包括支援センター管理者の同行もあり、インタビュー内容に影響した可能性も示唆された。また、本研究では、他者との多くの交流をもつ高齢女性の他者への思いの様相として、超越した心理面と活動面の 2 側面が明らかとなったが、因果関係については今後の課題となった。

【謝辞】

本研究にご協力いただきました A さんに御礼申し上げます。また、本研究においてご尽力いただいた A 町の地域包括支援センター管理者 T さんに感謝いたします。また、本研究の質的分析にアドバイスを頂いた本看護学部 石川美智先生に感謝いたします。

本研究は、日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究 (C) (課題番号 : 17K12560) の助成を受けた。

【利益相反】

本研究における利益相反はありません。

【文献】

- 濱野香苗, 堀内啓子 (2012) : 離島在住高齢者の QOL へのインフォーマルサポート等の関連. 日本看護研究学会雑誌 35 (5), p45-54
- 本多正幸, 松本武浩 (2012) : 地域見守り支援システムの実装と 3 年間の運用. 日本遠隔医療学会雑誌 8 (2), p227-229
- 井上高博 (2018) : 離島在住の要支援高齢者におけるソーシャル・キャピタルと生活機能の特徴—都市部・農村部を対照地域として. 日本地域看護学会誌 21 (3), p24-31
- 伊藤正哉, 中川威 (2012) : 高齢者ほど自分らしく生きている—老年の超越理論からみたエイジング・パラドックス—. アンチエイジング医学 8 (3), p370-374
- 片寄亮, 荻田美穂子, 大倉美香ら (2019) : 地域在住高齢者における要介護認定と日常生活活動との関連 Kami-study. 滋賀医科大学雑誌 32 (2), p20-25
- 金憲経 (2018) : 【ロコモとフレイル】フレイル予防・治療 update. 整形・災害外科 61 (6), p719-731
- 厚生労働省 (2013) : 地域包括ケアシステムの 5 つの構成要素と「自助・互助・共助・公助」. https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/dl/link1-3.pdf (2020 年 10 月 20 日アクセス可能)
- 古谷野亘・柴田博・中里克治他 (1987) : 地域老人における活動能力の測定—老研式活動能力指標の開発—. 日本公衆衛生学雑誌 34, p109-114
- 栗本鮎美, 栗田主一, 大久保孝義他 (2011) : 日本語版 Lubben Social Network Scale 短縮版 (LSNS-6) の作成と信頼性および妥当性の検討. 日本老年医学学会誌 48 (2), p149-157
- L. Dahlberg, KJ. McKee (2018): Social exclusion and well-being among older adults in rural and urban areas. Archives of Gerontology and Geriatrics 79, p176-184
- LP.Fried, CM Tangen et al (2001): Frailty in Older Adults: Evidence for a Phenotype. Journal of Gerontology, Vol56A, No3, M146-M156
- 増井幸恵 (2016) : 老年医学の展望 老年の超越. 日本老年医学会誌 53 (3), p210-214
- 増井幸恵, 権藤恭之, 河合千恵子他 (2010) : 心理的 well-being が高い虚弱高齢者における老年的超越の特徴—新しく開発した日本版老年的超越質問紙を用いて—. 老年社会科学 32 (1), p33-47
- 小野聡子, 福岡欣治 (2018) : つながりの実感および老年の超越からみた後期高齢者および超高齢者の主観的幸福観. 川崎医療福祉学会誌 27 (2), p313-323
- 齋藤民, 近藤克則, 村田千代栄ら (2015) : 高齢者の外出行動と初回的・余暇的活動における性差と地域差 JAGES プロジェクトから. 日本公衆衛生学会誌 62 (10), p596-608
- 高柳直人, 山城由華吏, 須藤元喜ほか (2014) : 活動量計を用いた日常歩行速度と ADL 低下に関する研究. 厚生指標 61 (4), p15-20
- 田中富子, 武田恵子 (2016) : 中山間地域で生活する後期高齢者の世代間交流と生活機能の関連性. 川崎医療福祉学会誌 26 (1), p37-47
- Tornstam L (1989): Gero-transcendence; A meta-theoretical reformulation of the disengagement theory. Aging: Clinical and Experimental Research 1(1), p55-63
- 上村一貴, 山田実, 岡本啓 (2018) : フレイル予防に向けたアクティブ・ラーニング型健康教育介入の効果—高齢者を対象としたランダム化比較試験—. 理学療法学 45 (4), p209-217
- 宇都宮すみ, 小岡亜希子, 陶山啓子 (2019) : 要支援高齢者の社会活動に関連する要因. 老年社会学 40 (4), p393-402
- 山浦晴男 (2012) : 質的統合法入門—考え方と手順. 医学書院

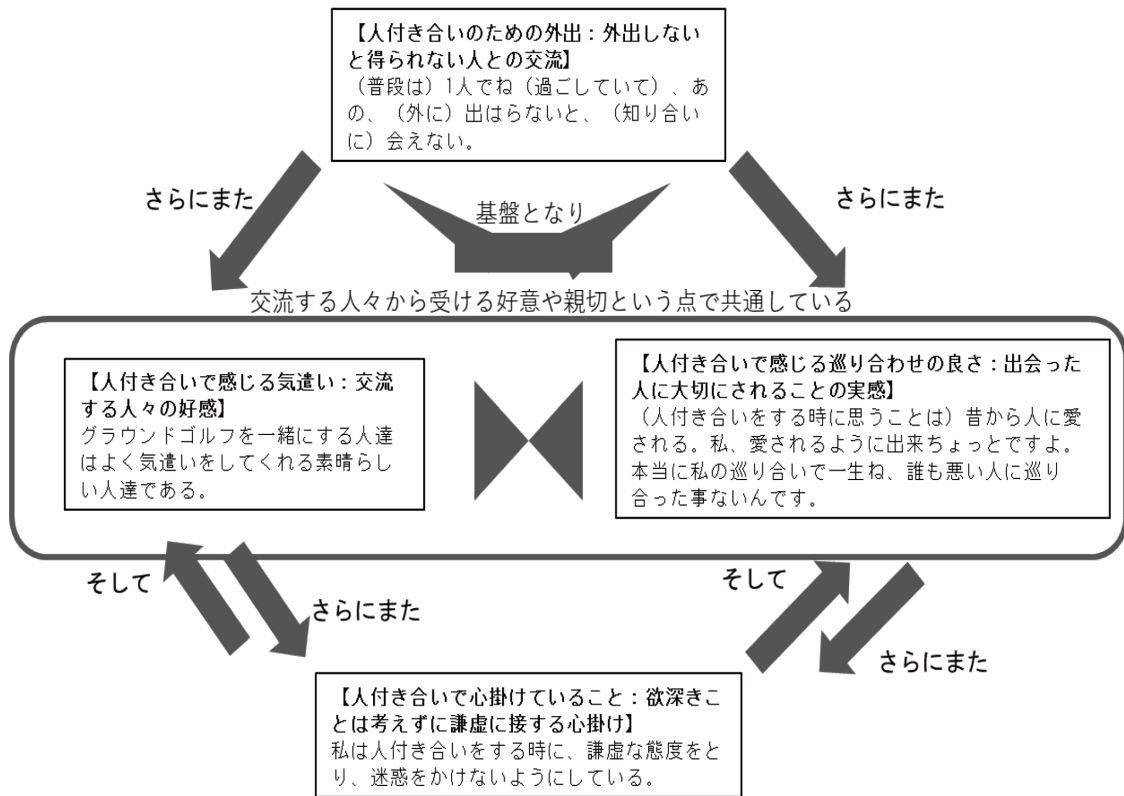


図1 A氏の他者への思いの様相

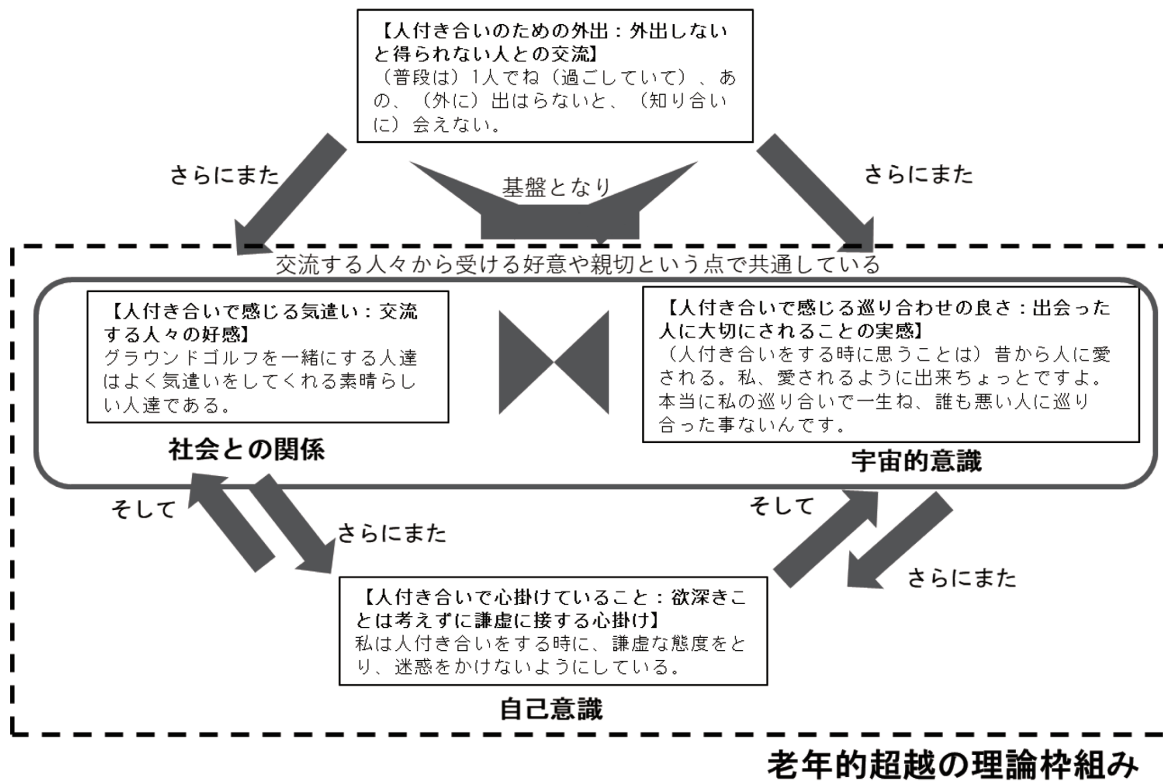


図2 A氏の他者への思いの様相と老年的超越の理論枠組み